

本朝沙門 日 蓮 撰

第一に八大地獄の因果を明かし、第二に無間地獄の因果の軽重を明かし、第三に問答料簡を明かし、第四に行者の弘經の用心を明かす。

第一に八大地獄の因果を明かさば、第一に等活地獄とは、此の閻浮提の地の下一千由旬にあり。此の地獄は縦広齊等にして一万由旬なり。此の中の罪人はたがい害心をいやく。若したまたま相見れば犬と猿とのあえるがごとし。各鉄の爪をもて互ひにつかみさく。血肉既に尽きぬれば唯骨のみあり。或は獄卒手に鉄杖を取りて頭より足にいたるまで皆打ちくだく。身体くだけて沙のごとし。或は利刀をもて分々に肉をさく。然れども又よみがへりよみがへりするなり。此の地獄の寿命は、人間の昼夜五十年をもて第一四王天の一日一夜として、四王天の天人の寿命五百歳なり。四王天の五百歳を此の等活地獄の一日一夜として、其の寿命五百歳なり。此の地獄の業因をいはず、ものゝ命をたつもの此の地獄に墮つ。螻蟻蚊虻等の小虫を殺せる者も懺悔なければ必ず地獄に墮つべし。譬へばはりなれども水の上におけば沈まざることなきが如し。又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を作れば後の懺悔には此の罪きえがたし。譬へばぬすみをして獄に入りぬるものゝ、しばらく経て後に御免を蒙りて獄を出ずれども、又重ねて盗みをして獄に入りぬれば出でてゆるされがたきが如し。されば当世の日本国の人には上一人より下万民に至るまで、此の地獄をまぬかるゝ人は一人もありがたかるべし。何に持戒のおぼへをとれる持律の僧たりとも、蟻虱などを殺さず、蚊虻をあやまたざるべきか。況んや其の外、山野の鳥鹿、江海の魚鱗を日々に殺すものをや。何に況んや牛馬人等を殺す者をや。

第二に黒繩地獄とは、等活地獄の下にあり、縦広は等活地獄の如し。獄卒、罪人をとらえて熱鉄の地に伏せて、熱鉄の繩をもて身にすみうて、熱鉄の斧をもて繩に随ってきりさきけずる。又鋸を以てひく。又左右に大なる鉄の山あり。山の上に鉄の幢を立て鉄の繩をはり、罪人に鉄の山ををせて繩の上よりわたす。繩より落ちてくだけ、或は鉄のかなえに墮とし入れてにらる。此の苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり。人間の百歳は第二の切利天の一日一夜なり。其の寿一千歳なり。此の天の寿一千歳を一日一夜として、此の第二の地獄の寿命一千歳なり。殺生の上に偷盗とて、ぬすみをかさねたるもの此の地獄にをす。当世の偷盗のもの、ものをぬすむ上、物の主を殺すもの此の地獄に墮つべし。

第三に衆合地獄とは、黒繩地獄の下にあり。縦広は上の如し。多くの鉄の山二つづつ相向かへり。牛頭・馬頭等の獄卒、手に棒を取って罪人を駈つて山の間に入らしむ。此の時両の山迫り来たりて合はせ押す。身体くだけて血流れて地にみつ。又種々の苦あり。人間の二百歳を第三の夜摩天の一日一夜として此の天の寿二千歳。此の天の寿を一日一

夜として此の地獄の寿命二千歳なり。殺生・偷盜の罪の上、邪姪とて他人のつまを犯す者此の地獄の中に墮つべし。而るに当世の僧尼士女、多分は此の罪を犯す。殊に僧にこの罪多し。士女は各々互ひにまぼり又人目をつまざる故に此の罪ををかさず。僧は一人ある故に姪欲とぼしきところに、若し孕むこと有らば父たゞされてあらはれぬべきゆへに、独ある女人をばをかさず。もしやかくると他人の妻をうかゞひ、ふかくかくれんとをもふなり。当世のほかたうとげなる僧の中に、ことに此の罪又多かるらんとおぼゆ。されば多分は当世たうとげなる僧此の地獄に墮つべし。

第四に叫喚地獄とは、衆合の下にあり。縦広前に同じ。獄卒悪声出だして弓箭をもて罪人をいる。又鉄の棒を以て頭を打ちて、熱鉄の地をはしらしむ。或は熱鉄の煎架にうちかへしうちかへし此の罪人をあぶる。或は口を開けてわける銅のゆを入れるれば、五臓やけて下より直に出ず。寿命をいはず、人間の四百歳を第四の都率天の一日一夜とす。又都率天の四千歳なり。都率天の四千歳の寿を一日一夜として、此の地獄の寿命四千歳なり。此の地獄の業因をいはず、殺生・偷盜・邪姪の上、飲酒とて酒のむもの此の地獄に墮つべし。当世の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の大酒なる者、此の地獄の苦免れがたきか。大論には酒に三十六の失をいだし、梵網経には酒盃をすめる者、五百生に手なき身と生まるととかせ給ふ。人師の釈にはみづていの者となるとみえたり。況んや酒をうりて人にあたえたる者をや。何に況んや酒に水を入れてうるものをや。当世の在家の人々この地獄の苦まぬかれがたし。

第五に大叫喚地獄とは、叫喚の下にあり。縦広前に同じ。其の苦の相は上の四つの地獄の諸の苦に十倍して重くこれをうく。寿命の長短を云はず、人間の八百歳は第五の化楽天の一日一夜なり。此の天の寿八千歳なり。此の天の八千歳を一日一夜として、此の地獄の寿命八千歳なり。殺生・偷盜・邪姪・飲酒の重罪の上に妄語とてそらごとせる者此の地獄に墮つべし。当世の諸人は設ひ賢人・上人などいはるゝ人々も、妄語せざる時はありとも、妄語をせざる日はあるべからず。設ひ日はありとも月はあるべからず。設ひ月はあるとも年はあるべからず。設ひ年はあるとも一期生妄語せざる者はあるべからず。若ししからば当世の諸人一人もこの地獄をまぬかれがたきか。

第六に焦熱地獄とは、大叫喚地獄の下にあり。縦広前におなじ。此の地獄に種々の苦あり。若し此の地獄の豆計りの火を閻浮提にをけらんに、一時にやけ尽きなん。況んや罪人の身の軟らかなることわたのごとくなるをや。此の地獄の人は前の五つの地獄の火を見る事雪の如し。譬へば人間の火の薪の火よりも鉄銅の火の熱きが如し。寿命の長短は人間の千六百歳を第六の他化天の一日一夜として此の天の寿千六百歳なり。此の天の千六百歳を一日一夜として、此の地獄の寿命一千六百歳なり。業因を云はず、殺生・偷盜・邪姪・飲酒・妄語の上、邪見とて因果なしといふ者此の中に墮つべし。邪見とは、有る人の云はく、人飢えて死ぬれば天に生まるべし等云云。総じて因果をしらぬ者を邪見と申すなり。世間の法には慈悲なき者を邪見の者という。当世の人々此の地獄を免れがたきか。

第七に大焦熱地獄とは、焦熱の下にあり。縦広前の如し。前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受くるなり。其の寿命は半中劫なり。業因を云はゞ、殺生・偷盜・邪姪・飲酒・妄語・邪見の上に浄戒の比丘尼ををかける者、此の中に墮つべし。又比丘、酒を以て不邪姪戒を持てる婦女をたぼらかし、或は財物をあたへて犯せるもの此の中に墮つべし。当世の僧の中に多く此の重罪あるなり。大悲經の文に、末代には士女は多くは天に生じ、僧尼は多くは地獄に墮つべしととかれたるはこれていの事か。心あらん人々ははづべしはづべし。総じて上の七大地獄の業因は諸經論をもて勘え見るに当世日本国の四衆にあて見るに、此の七大地獄をはなるべき人を見ず、又きかず。涅槃經に云はく「末代に入りて人間に生ぜん者は爪上の土の如し。三惡道に墮つるものは十方世界の微塵の如し」と説かれたり。若し爾らば我等が父母兄弟等の死ぬる人は皆上の七大地獄にこそ墮ち給ひては候らめ。あさましともいうばかりなし。竜と蛇と鬼神と仏・菩薩・聖人をば未だ見ず、たゞをとにのみこれをきく。当世に上の七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず、又をとにもきかず。而るに我が身よりはじめて一切衆生七大地獄に墮つべしとをもえる者一人もなし。設ひ言には墮つべきよしをさえづれども、心には墮つべしともをもはず。又僧尼士女、地獄の業をば犯すとはをもえども、或は地藏菩薩等の菩薩を信じ、或は阿彌陀仏等の仏を待み、或は種々の善根を修したる者もあり。皆をもはく、我はかゝる善根をもてればなんどうちをもひて地獄をもをぢず。或は宗々を習へる人々は、各々の智分をたのみて又地獄の因ををぢず。而るに仏・菩薩を信じたるも、愛子夫婦などをあいし、父母主君などをうやまうには雲泥なり。仏・菩薩等をばかろくをもえるなり。されば当世の人々の、仏・菩薩を待みぬれば、宗々を学したれば地獄の苦はまぬかれなんなんどもをもえるは僻案にや。心あらん人々はよくよくはかりをもうべきか。

第八に大阿鼻地獄とは、又は無間地獄と申すなり。欲界の最底大焦熱地獄の下にあり。此の地獄は縦広八万由旬なり、外に七重の鉄の城あり。地獄の極苦は且く之を略す。前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦を以て一分として、大阿鼻地獄の苦、一千倍勝れたり。此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事、他化自在天の楽しみたけじざいてんの如し。此の地獄の香かのくさゝを人かぐならば、四天下・欲界・六天の天人皆しゝなん。されども出山・没山と申す山、此の地獄の臭いきいきををさえて、人間へ来たらせざる故に、此の世界の者死せずと見へぬ。若し仏此の地獄の苦を具つぶさに説かせ給はゞ、人聴きて血をはいて死すべき故に、くわしく仏説き給はずとみへたり。此の無間地獄の寿命の長短は一いっちゅうこう中劫なり。一中劫と申すは、此の人寿無量歳なりしが百年に一寿を減じ、又百年に一寿を減ずるほどに、人寿十歳の時に減ずるを一減と申す。又十歳より百年に一寿を増し、又百年に一寿を増する程に、八万歳に増するを一増と申す。此の一増一減の程を小劫として、二十の増減を一中劫とは申すなり。此の地獄に墮ちたる者、これ程久しく無間地獄に住して大苦をうくるなり。業因を云はゞ、五逆罪を造る人此の地獄に墮つべし。五逆罪と申すは一に殺父、二に殺母、三に殺阿羅漢、四に出仏身血、五に破和合僧

なり。今の世には仏ましまさず。しかれば出仏身血あるべからず。和合僧なければ破和合僧なし。阿羅漢なければ殺阿羅漢これなし。但殺父殺母の罪のみありぬべし。しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに、此の罪をかしがたし。若し爾らば、当世には阿鼻地獄に墮つべき人すくなし。但し相似の五逆罪これあり。木画の仏像・堂塔等をやき、かの仏像等の寄進の所をうばいとり、卒兜婆等をきりやき、智人を殺しなどするもの多し。此等は大阿鼻地獄の十六の別処に墮つべし。されば当世の衆生十六の別処に墮つもの多きか。又謗法の者この地獄に墮つべし。

第二に無間地獄の因果の輕重を明かさば、問うて云はく、五逆罪より外の罪によりて無間地獄に墮ちんことあるべしや。答へて云はく、誹謗正法の重罪なり。問うて云はく、証文如何。答へて云はく、法華經第二に云はく「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云。此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見へたり。問うて云はく、五逆と謗法と罪の輕重如何。答へて云はく、大品經に云はく「舍利弗仏に白して言さく、世尊五逆罪と破法罪と相似するや。仏舍利弗に告げたまはく、應に相似と言ふべからず。所以は何ん、若し般若波羅蜜を破れば則ち十方諸仏の一切智一切種智を破るに為んぬ。仏宝を破るが故に、法宝を破るが故に、僧宝を破るが故に。三宝を破るが故に則ち世間の正見を破す。世間の正見を破れば○則ち無量無辺阿僧の罪を得るなり。無量無辺阿僧の罪を得已はつて則ち無量無辺阿僧の憂苦を受くるなり」文。又云はく「破法の業の因縁集むるが故に無量百千万億歳大地獄の中に墮つ。此の破法人の輩は一大地獄より一大地獄に至り、若し劫火起る時は他方の大地獄の中に至る。是くの如く十方に遍くして彼の中に劫火起るが故に、彼より死するも破法の業の因縁未だ尽きざるが故に、還つて是の間の大地獄の中に来たる」等云云。法華經第七に云はく「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り。悪口罵詈して言はく、是の無智の比丘と。或は杖木瓦石を以て之を打擲す。乃至千劫阿鼻地獄に於て大苦悩を受く」等云云。此の經文の心は、法華經の行者を悪口し、及び杖を以て打擲せるもの、其の後に懺悔せりといへども、罪いまだ減せずして千劫阿鼻地獄に墮ちたりと見えぬ。懺悔せる謗法の罪すら五逆罪に千倍せり。況んや懺悔せざらん謗法にをいては阿鼻地獄を出づる期かたかるべし。故に法華經第二に云はく「經を誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入り、一劫を具足して劫尽きなば更生まれん。是くの如く展轉して無数劫に至らん」等云云。

第三に問答料簡を明かさば、問うて云はく、五逆罪と謗法罪との輕重はしんぬ。謗法の相貌如何。答へて云はく、天台智者大師の梵網經の疏に云はく「謗とは背くなり」等云云。法に背くが謗法にてはあるか。天親の仏性論に云はく「若し憎むは背くなり」等云云。この文の心は正法を人に捨てさするが謗法にてあるなり。問うて云はく、委細に相貌をしらんとおもう。あらあらしめすべし。答へて云はく、涅槃經經五に云はく「若し人有つて如来は無常なりと言はん。云何ぞ是の人舌墮落せざらん」等云云。此の文の心は仏を無常といはん人は舌墮落すべしと云云。問うて云はく、諸の小乘經に仏を無常

と説かるゝ上、又所化の衆皆無常と談じき。若し爾らば、仏並びに所化の衆の舌墮落すべしや。答へて云はく、小乗經の仏を小乗經の人が無常ととき談ずるは舌たゞれざるか。大乘經に向かつて仏を無常と談じ、小乗經に対して大乘經を破するが舌は墮落するか。此をもてをもうに、おのが依經には随えども、すぐれたる經を破するは破法となるか。若し爾らば、設ひ觀經・華嚴經等の權大乘經の人々、所依の經の文の如く修行すとも、かの經にすぐれたる經々に随はず、又すぐれざる由を談ぜば謗法となるべきか。されば觀經等の經の如く法をえたりとも、觀經等を破せる經の出来したらん時、其の經に随はずば破法となるべきか。小乗經を以てなぞらえて心うべし。問うて云はく、双觀經等に乃至十念即得往生などとかれて候が、彼のけうの教への如く十念申して往生すべきを、後の經を以て申しやぶらば謗法にては候まじきか。答へて云はく、仏、觀經等の四十余年の經々を束ねて未顕眞実と説かせ給ひぬれば、此の經文に随ふて乃至十念即得往生等は実には往生しがたしと申す。此の經文なくば謗法となるべし。問うて云はく、或人云はく、無量義經の「四十余年未顕眞実」の文はあへて四十余年の一切の經々並びに文々句々を皆未顕眞実と説き給ふにはあらず。但四十余年の經々に処々に決定性の二乗を永不成仏ときらはせ給ひ、釈迦如来を始成正覺と説き給ひしを、其の言ばかりをさして未顕眞実とは申すなり。あへて余事にはあらず。而るをみだりに四十余年の文を見て、觀經等の凡夫のために九品往生などを説きたるを、妄りに往生はなき事なりなど押へ申すは、あにおそろしき謗法の者にあらずやなど申すはいかに。答へて云はく、此の料簡は東土の得一が料簡に似たり。得一が云はく、未顕眞実とは決定性の二乗を、仏、爾前の經にして永不成仏ととかれしを未顕眞実とは嫌はるゝなり。前四味の一切には亘るべからずと申しき。伝教大師は前四味に亘りて文々句々に未顕眞実と立て給ひき。さればこの料簡は古の謗法の者の料簡に似たり。但し且く汝等が料簡に随ひて尋ね明らめん。問ふ、法華已前に二乗作仏を嫌ひけるを今未顕眞実というとならば、先づ決定性の二乗を仏の永不成仏と説かせ給ひし処々の經文ばかりは、未顕眞実の仏の妄語なりと承伏せさせ給ふか。さては仏の妄語は勿論なり。若し爾らば、妄語の人の申すことは有無共に用いぬ事にてあるぞかし。決定性の二乗永不成仏の語ばかり妄語となり、若し余の菩薩凡夫の往生成仏等は実語となるべきならば、信用しがたき事なり。譬へば東方を西方と妄語し申す人は西方を東方と申すべし。二乗を永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆるすも又妄語にあらずや。五乗は但一仏性なり。二乗の仏性をかくし、菩薩凡夫の仏性をあらはすは、返りて菩薩凡夫の仏性をかくすなり。有る人云はく、四十余年未顕眞実とは、成仏の道ばかり未顕眞実なり。往生等は未顕眞実にはあらず。又難じて云はく、四十余年が間の説の成仏を未顕眞実と承伏せさせ給はゞ、双觀經に云ふ「正覺を取らじ」「成仏より已來凡そ十劫を歴たり」等の文は未顕眞実と承伏せさせ給ふか。若し爾らば、四十余年の經々にして法藏比丘の阿弥陀仏になり給はずば、法藏比丘の成仏すでに妄語なり。若し成仏妄語ならば何れの仏か行者を迎へ給ふべきや。又かれ此の難を会通して云はん、四十余年が間は成仏はなし。阿弥陀

仏は今の成仏にはあらず、過去の成仏なり等云云。今難じて云はく、今日の四十余年の経々にして実の凡夫の成仏を許されずば、過去遠々劫おんのんごうの四十余年の権経にても成仏叶ひがたきか。三世の諸仏の説法の儀式皆同じきが故なり。或は云はく「疾く無上菩提を成ずることを得ず」ととかるれば、四十余年の経々には疾くこそ仏にはならねども、遅く劫を経てはなるか。難じて云はく、次下の大莊嚴菩薩等の領解に云はく「不可思議無量無辺阿僧劫ふかしぎむりょうむへんあそうぎこうを過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」等云云。

此の文の如くならば劫にぜんを経てばかも爾前の経計りにては成仏はかたきか。有るひは云ふ、華嚴宗ごんしゅうりょうけんの料簡に云はく、四十余年の内には華嚴経計りは入るべからず。華嚴経にすでに往生成仏此あり。なんぞ華嚴経を行じて往生成仏をとげざらん。答へて云はく、四十余年の内には華嚴経入るべからずとは華嚴宗の人師の義なり。無量義経むりょうぎには正しく四十余年の内には華嚴海空と名目けごんかいこうを呼び出だして、四十余年の内にかずへ入れられたり。人師を本とせば仏を背くになりぬ。問うて云はく、法華経を離れて往生成仏をとげずば、仏世に出でさせ給ひては但法華経計りをこそ説き給はめ。なんぞわづらはしく四十余年の経々を説かせ給ふや。答へて云はく、此の難は仏自ら答へ給へり。「若し但仏乗を讃ぶつじょうぜば衆生苦もつざいに没在して法を破して信ぜざるが故に三悪道に墮ちなん」等の经文これなり。問うて云はく、いかなれば爾前の経をば衆生謗ぼうぜざるや。答へて云はく、爾前の経々は万差なれども、束ねて此を論ずれば随他意ずいたいと申して衆生の心をとかれてはんべり。故に違する事なし。譬へば水に石いをなぐるにあらそうことなきがごとし。又しなじなの説教はんべれども九界の衆生の心を出でず。衆生の心は皆善につけ悪につけて迷を本とするゆへに仏にはならざるか。

問うて云はく、衆生謗ぼうずべきゆへに仏最初に法華経をとき給はずして、四十余年の後に法華経をとき給はゞ、汝なんぞ当世ごんきょうに権経をばとかずして、左右なく法華経をといて人に謗をなさせて悪道だに墮すや。答へて云はく、仏在世には仏菩提樹の下ぼだいじゆに坐し給ひて機をかゞみ給ふに、当時法華経を説くならば、衆生謗じて悪道に墮ちぬべし。四十余年過ぎて後にとかば、謗しよじゅうふたいないしぜずして初住不退乃至妙覚ちけんにのぼりぬべしと知見しましたしき。末代濁世じよくせには当機にして初住の位に入るべき人は万に一人もありがたかるべし。又能化のうけの人も仏にあらざれば、機をかゞみん事もこれかたし。されば逆縁順縁のために、先づ法華経を説くべしと仏ゆるし給へり。但し又滅後なりとも、当機衆になりぬべきものには、先づ権経をとく事もあるべし。又悲を先とする人は先づ権経をとく、釈迦仏のごとし。慈を先とする人は先づ実経じつきょうをとくべし、不輕菩薩のごとし。又末代の凡夫はなにとなくとも悪道を免れんことはかたかるべし。同じく悪道に墮つるならば、法華経を謗もんぼうしゅうぼうだぜさせて墮すならば、世間の罪をもて墮ちたるにはなるべからず。「聞法生謗おじごくしゅうおくようごうしゃぶつしゃ於地獄勝於供養恒沙仏者」等の文のごとし。此の文の心は、法華経をばうじて地獄に墮ちたるは、釈迦仏・阿弥陀仏等の恒河沙の仏を供養し、帰依渴仰する功德には百千万倍すぎたりととかれたり。問うて云はく、上の義のごとくならば、華嚴・法相・三論・真言・浄土等の祖師はみな謗法うんでいちょうかに墮すべきか。華嚴宗には華嚴経は法華経には雲泥超過

せり。法相・三論もてかくのごとし。真言宗には日本国に二の流あり。東寺の真言は法華經は華嚴經にをとり。何に況んや大日經にをいてをや。天台の真言には大日經と法華經とは理は齊等なり。印・真言等は超過せりと云云。此等は皆惡道に墮つべしや。答へて云はく、宗をたて、經々の勝劣を判ずるに二の義あり。一は似破、二は能破なり。一に似破とは、他の義は吉しとおもえども此をはず。かの正義を分明にあらはさんがためか。二に能破とは、実に他人の義の勝れたるをば棄へずして、迷つて我が義すぐれたりとをもひて、心中よりこれを破するをば能破という。されば彼の宗々の祖師に似破・能破の二の義あるべし。心中には法華經は諸經に勝れたりと思へども、且く違して法華經の義を顯はさんとをもひて、これをはずする事あり。提婆達多・阿闍世王・諸の外道が仏のかたきとなりて仏徳を顯はし、後には仏に帰せしがごとし。又実の凡夫が仏のかたきとなりて惡道に墮つる事これ多し。されば諸宗の祖師の中に回心の筆をかゝらずば、謗法の者惡道に墮ちたりとするべし。三論の嘉祥・華嚴の澄觀・法相の慈恩・東寺の弘法等は回心の筆これあるか。よくよく尋ねならうべし。問うて云はく、まことに今度生死をはなれんとをもはんに、なにものをかいとひ、なにものをか願ふべきや。答ふ、諸の經文には女人等をいとふべしとみへたれども、双林最後の涅槃經に云はく「菩薩是の身に無量の過患具足充滿すと見ると雖も、涅槃經を受持せんと欲するを為ての故に猶好く將護して乏少ならしめず。菩薩惡象等に於ては心に恐怖することなかれ。惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。何を以ての故に。是惡象等は唯能く身を壞りて心を壞ること能はず。惡知識は二俱に壞るが故に。惡象の若きは唯一身を壞る。惡知識は無量の身無量の善心を壞る。惡象の為に殺されては三趣に至らず。惡友の為に殺されては必ず三趣に至る」等云云。此の經文の心は、後世を願はん人は一切の惡縁を恐るべし。一切の惡縁よりは惡知識ををそるべしとみえたり。されば大莊嚴佛の末の四の比丘は、自ら惡法を行じて十方の大阿鼻地獄を経るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄に墮としぬ。鶻掘摩羅は摩尼跋陀が教へに随つて九百九十九人の指をきり、結句、母並びに佛をがいせんとぎす。善星比丘は佛の御子、十二部經を受持し、四禪定をえ、欲界の結を断じたりしかども、苦得外道の法を習ふて生身に阿鼻地獄に墮ちぬ。提婆が六万歳・八万歳を暗んじたりしかども、外道の五法を行じて現に無間に墮ちにき。阿闍世王の父を殺し母を害せんと擬せし、大象を放つて佛をうしないたてまつらんとせしも惡師提婆が教へなり。俱伽利比丘が舍利弗・目連をそしりて生身に阿鼻に墮せし、大族王の五竺の佛法僧をほろぼせし、大族王の舍弟は加溼弥羅国の王となりて、健駄羅国の卒塔婆・寺塔一千六百所をうしなひし、金耳国王の佛法をほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万九千九百九十九人の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王の佛法を滅し菩提樹をきり根をほりし、周の宇文王の四千六百余所の寺院を失ひ、二十六万六百余の僧尼を還俗せしめし、此等は皆惡師を信じ惡鬼其の身に入りし故なり。問うて云はく、天竺・震旦は外道が佛法をほろぼし、小乗が大乗をやぶるとみえたり。此の日本国もしかるべきか。答へて云はく、月支・尸那には外道あり、小乗あり。此の日本国には外道なし、小乗の者なし。

紀典博士等これあれども、仏法の敵となるものこれなし。小乗の三宗これあれども、彼の宗を用いて生死をはなれんとおもはず。但大乘を心うる才覚とをもえり。但し此の国には大乘の五宗のみこれあり。人々皆をもえらく、彼の宗々にして生死をはなるべしとをもう故に、あらそいも多くいできたり。又檀那の帰依も多くあるゆへに利養の心もふかし。

第四に行者仏法を弘むる用心を明かさば、夫仏法をひろめんとをもはんものは必ず五義を存じて正法をひろむべし。五義とは、一には教、二には機、三には時、四には国、五には仏法流布の前後なり。

第一に教とは、如来一代五十年の説教は大小・権実・顕密の差別あり。華嚴宗には五教を立て一代ををさめ、其の中には華嚴・法華を最勝とし、華嚴・法華の中に華嚴経を以て第一とす。南三北七並びに華嚴宗の祖師・日本国の東寺の弘法大師此の義なり。法相宗は三時に一代ををさめ、其の中に深密・法華経を一代の聖教にすぐれたりとす。深密・法華の中、法華経は了義経の中の不了義経、深密経は了義経の中の了義経なり。三論宗に又二蔵三時を立つ。三時の中の第三、中道教とは、般若・法華なり。般若・法華の中には般若最第一なり。真言宗には日本国に二の流あり。東寺流は弘法大師十住心を立て、第八法華・第九華嚴・第十真言。法華経は大日経に劣るのみならず猶華嚴経に下るなり。天台の真言は慈覚大師等、大日経と法華経とは広略の異。法華経は理秘密、大日経は事理俱密なり。浄土宗には聖道・浄土、難行・易行、雑行・正行を立てたり。浄土の三部経より外の法華経等の一切経は難行・聖道・雑行なり。禅宗には二の流あり。一流は一切経、一切の宗の深義は禅宗なり。一流は如来一代の聖教は皆言説、如来の口輪の方便なり。禅宗は如来の意密、言説におよばず、教外の別伝なり。俱舍宗・成実宗・律宗は小乗宗なり。天竺・震旦には小乗宗の者、大乘を破する事これ多し。日本国には其の義なし。

問うて云はく、諸宗の異義区なり。一々に其の謂はれありて得道をなるべきか。又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか。答へて云はく、異論相違ありといえども皆得道なるか。仏の滅後四百年にあたりて健駄羅國の迦式色迦王、仏法を貴み、一夏、僧を供し仏法をといしに一々の僧異義多し。此の王不審して云はく、仏説は定んで一ならん、終に脇尊者に問ふ。尊者答へて云はく、金杖を折って種々の物につくるに、形は別なれども金杖は一なり。形の異なるをば諍ふといへども、金たる事をあらそはず。門々不同なれば、いりかどをば諍へども、入理は一なり等云云。又求那跋摩云はく、諸論各異端なれども修行の理は二無し。偏執に是非有りととも達者は違諍なし等云云。又五百羅漢の真因各異なれども同じく聖理をえたり。大論の四悉檀の中の対治悉檀、撰論の四意趣の中の衆生意樂意趣、此等は此の善を嫌ひ、此の善をほむ。檀戒進等一々にそしり、一々にほむる、皆得道をなる。此等を以てこれを思ふに、護法・清弁のあらそい、智光・戒賢の空・中、南三北七の頓漸不定、一時・二時・三時・四時・五時、四宗・五宗・六宗、天台の五時、華嚴の五教、真言教の東寺・天台の諍、浄土

宗の聖道・浄土、禪宗の教外・教内、入門は差別せりといふとも実理に入る事は但一なるべきか。

難じて云はく、華嚴の五教、法相・三論の三時、禪宗の教外、浄土宗の難行・易行、南三北七の五時等、門はことなりといへども入理一にして、皆仏意に叶ひ謗法とならずといはゞ、謗法といふ事あるべからざるか。謗法とは法に背くという事なり。法に背くと申すは、小乗は小乗經に背き、大乘は大乘經に背く。法に背かばあに謗法とならざらん。謗法とならばなんぞ苦果をまねかざらん。此の道理にそむくこれひとつ。大般若經に云はく「般若を謗する者は十方の大阿鼻地獄に墮つべし」と。法華經に云はく「若し人信ぜず乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と。涅槃經に云はく「世に難治の病三あり。一には四重、二には五逆、三には謗大乘なり」と。此等の經文あにむなしかるべき。此等は証文なり。されば無垢論師・大慢婆羅門・熙連禪師・嵩靈法師等は正法を謗じて、現身に大阿鼻地獄に墮ち、舌口中に爛れたり。これは現証なり。天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘經をはしき。後に無著菩薩に対して此の罪を懺悔せんがために舌を切らんとくい給ひき。謗法もし罪とならずんば、いかに千部の論師懺悔をいたすべき。闡提とは天竺の語、此には不信と翻ず。不信とは、一切衆生悉有仏性を信ぜざるは闡提の人と見へたり。不信とは謗法の者なり。恒河の七種の衆生の第一は一闡提謗法常没の者なり。第二には五逆謗法常没等の者なり。あに謗法ををそれざらん。答へて云はく、謗法とは、只由なく仏法を謗するを謗法というか。我が宗をたてんがために余法を謗するは謗法にあらざるか。撰論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは、仮令人ありて一生の間一善をも修せず但悪を作る者あり。而るに小縁にあひて何れの善にてもあれ一善を修せんと申す。これは隨喜讚歎すべし。又善人あり、一生の間たゞ一善を修す。而るを他の善へうつさんがためにそのぜんをそしる。一事の中に於て或は呵し或は讚ずといふこれなり。大論の四悉檀の中の対治悉檀又これおなじ。浄名經の彈呵と申すは阿含經の時ほめし法をそしるなり。此等を以ておもふに、或は衆生多く小乗の機あれば、大乘を謗りて小乗經に信心をまし、或は衆生多く大乘の機なれば、小乗經をそしりて大乘經に信心をあつくす。或は衆生弥陀仏に縁あれば、諸仏をそしりて弥陀に信心をまさしめ、或は衆生多く地蔵に縁あれば、諸菩薩をそしりて地蔵をほむ。或は衆生多く華嚴經に縁あれば、諸經をそしりて華嚴經をほむ。或は衆生大般若經に縁あれば、諸經をそしりて大般若經をほむ。或は衆生法華經、或は衆生大日經等、同じく心うべし。機を見て或は讚め或は毀る、共に謗法とならず。而るを機をしらざる者、みだりに或は讚め或は毀るは謗法となるべきか。例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・浄土等の諸師の諸經をはして我が宗を立つるは謗法とならざるか。

難じて云はく、宗を立てんに諸經諸宗を破し、仏・菩薩を讚むるに仏・菩薩を破し、他の善根を修せしめんがためにこの善根をはする、くるしからずば、阿含等の諸の小乗經に華嚴經等の諸大乘經をはしたる文ありや。華嚴經に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる文これありや。答へて云はく、阿含小乗經に諸大乘經をはしたる文はなけれども、

華嚴經には二乗・大乘・一乗をあげて二乗・大乘をはし、涅槃經には諸大乘經をあげて涅槃經に対してこれを破す。密嚴經には一切經中王と説き、無量義經には四十余年未顕眞実ととかれ、阿彌陀經には念仏に対して諸經を小善根ととかる。これらの例一に
あらず。故に又彼の經々による人師、皆此の義を存ぜり。此等をもて思ふに、宗を立つる方は我が宗に対して諸經を破るはくるしからざるか。

難じて云はく、華嚴經には小乗・大乘・一乗とあげ、密嚴經には一切經中の王ととかれ、涅槃經には是諸大乘とあげ、阿彌陀經には念仏に対して諸經小善根とはとかれたれども、無量義經のごとく四十余年と年限を指して、其の間の大部の諸經を、阿含・方等・般若・華嚴等の名をよびあげて勝劣をとける事これなし。涅槃經の是諸大乘の文計りこそ、双林最後の經として是諸大乘ととかれたれば、涅槃經には一切經は嫌はるかとおぼうれども、是諸大乘經と挙げて、次下に諸大乘經を列ねたるに、十二部修多羅・方等・般若等とあげたり。無量義經・法華經をば載せず。但し無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含・方等・般若・華嚴經をあげたり。いまだ法華經・涅槃經の勝劣はみへず。密嚴に一切經中王とはあげたれども、一切經をあぐる中に華嚴・勝鬘等の諸經の名をあげて一切經中王ととく。故に法華經等とはみへず。阿彌陀經の小善根は時節もなし小善根の相貌もみへず。たれか知る、小乗經を小善根というか。又人天の善根を小善根というか。又觀經・双觀經の所説の諸善を小善根というか。いまだ一代を念仏に対して小善根というとはきこえず。又大日經・六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも、一代の一切經を嫌ふてその經をほめたる文はなし。但し無量義經計りこそ前四十余年の諸經を嫌ひ、法華經一經に限りて、已説の四十余年・今説の無量義經・当説の未来にとくべき涅槃經を嫌ふて法華經計りをほめたり。釈迦如来・過去現在未来の三世の諸仏、世にいで給ひて各々一切經を説き給ふに、いずれの仏も法華經第一なり。例せば上郎・下郎不定なり。田舎にしては、百姓・郎徒等は侍を上郎といふ。洛陽にして、源平等已下を下郎といふ。三家を上郎といふ。又主を王といはゞ百姓も宅中の王なり。地頭・領家等も又村・郷・郡・国の王なり。しかれども大王にはあらず。小乗經には無為涅槃の理が王なり。小乗の戒定等に対して智慧は王なり。諸大乘經には中道の理が王なり。又華嚴經は円融相即の王、般若經は空理の王、大集經は守護正法の王、薬師經は薬師如来の別願を説く經の中の王、双觀經は阿彌陀仏の四十八願を説く經の中の王、大日經は印・眞言を説く經の中の王、一代一切經の王にはあらず。法華經は眞諦俗諦・空仮中・印眞言・無為の理・十二大願・四十八願、一切諸經の所説の所詮の法門の大王なり。

これ教をしれる者なり。
而るを善無畏・金剛智・不空・法蔵・澄觀・慈恩・嘉祥・南三北七・曇鸞・道綽・善導・達磨等の、我が所立の依經を一代第一といえるは教をしらざる者なり。但し一切の人師の中には天台智者大師一人教をしれる人なり。曇鸞・道綽等の聖道淨土・難行易行・正行雜行は、源十住毘婆沙論に依る。彼の本論に難行の内に法華・眞言等を入れると謂へるは僻案なり。論主の心と論の始中終をしらざる失あり。慈

恩が深密經の三時に一代ををさめたる事、又本經の三時に一切經の撰らざる事をしらざる失あり。法藏・澄觀等が五教に一代ををさむる中に、法華經・華嚴經を円教と立て、又華嚴經は法華經に勝れたりとをもへるは、所依の華嚴經に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小・久成ありとをもひ、華嚴超過の法華經を我が經に劣ると謂ふは僻見なり。三論の嘉祥の二藏等、又法華經に般若經すぐれたりとをもふ事は僻案なり。善無畏等が大日經は法華經に勝れたりといふ。法華經の心をしらざるのみならず、大日經をもしらざる者なり。

問うて云はく、此等皆謗法ならば悪道に墮ちたるか如何。答へて云はく、謗法に上中下雑の謗法あり。慈恩・嘉祥・澄觀等が謗法は上中の謗法か。其の上自身も謗法としれるかの間、悔い還す筆これあるか。又他師をはするに二あり。能破・似破これなり。教はまされりとしれども、是非をあらはさんがために法をはす。これは似破なり。能破とは、実にまされる經を劣とをもうてこれをはす、これは悪能破なり。又現にをとれるをはす、これ善能破なり。但し脇尊者の金杖の譬へは、小乘經は多しといへども同じ苦・空・無常・無我の理なり。諸人同じく此の義を存じて、十八部・二十部・相ひ諍論あれども、但門の諍ひにて理の諍ひにはあらず。故に共に謗法とならず。外道が小乘經を破するは、外道の理は常住なり、小乘經の理は無常なり空なり。故に外道が小乘經をはするは謗法となる。大乘經の理は中道なり。小乘經は空なり。小乘經の者が大乘經をはするは謗法となる。大乘經の者が小乘經をはするは破法とならず。諸大乘經の中の理は未開会の理、いまだ記小久成これなし。法華經の理は開会の理、記小久成これあり。諸大乘經の者が法華經をはするは謗法となるべし。法華經の者の諸大乘經を謗ずるは謗法となるべからず。大日經・真言宗は未開会、記小久成なくば法華經已前なり。開会・記小・久成を許さば涅槃經とおなじ。但し善無畏三藏・金剛智・不空・一行等の性惡の法門・一念三千の法門は天台智者の法門をぬすめるか。若し爾らば、善無畏等の謗法は似破か又雑謗法か。五百羅漢の真因は小乘十二因縁の事なり。無明・行等を縁として空理に入ると見へたり。門は諍へども謗法とならず。撰論の四意趣・大論の四悉檀等は、無著菩薩・竜樹菩薩滅後の論師として、法華經を以て一切經の心をえて四悉・四意趣等を用いて爾前の經々の意を判ずるなり。未開会の四意趣・四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を同ぜば、あに謗法にあらずや。此等をよくよくするは教をしれる者なり。

四句あり。一に信而不解、二に解而不信、三に亦信亦解、四に非信非解。問うて云はく、信而不解の者は謗法なるか。答へて云はく、法華經に云はく「信を以て入ることを得」等云云。涅槃經の九に云はく。難じて云はく、涅槃經三十六に云はく「我契經の中に於て説く、二種の人有り仏法僧を謗ずと。一には不信にして瞋恚の心あるが故に、二には信ずと雖も義を解せざるが故に。善男子、若し人信心あつて智慧有ること無き、是の人は則ち能く無明を増長す。若し智慧有つて信心有ること無き、是の人は則ち能く邪見を増長す。善男子、不信の人は瞋恚の心あるが故に説いて仏法僧宝有ること無

しと言はん。信ずる者にして慧無くば顛倒して義を解するが故に、法を聞く者をして仏
 法僧を謗ぜしむ」等云云。此の二人の中には信じて而も解せざる者を謗法と説く如何。
 答へて云はく、此の信而不解の者は涅槃經の三十六に恒河の七種の衆生の第二の者を説
 くなり。此の第二の者は涅槃經の一切衆生悉有仏性の説を聞いて之を信ずと雖も而も
 又不信の者なり。問うて云はく、如何ぞ信ずと雖も而も不信なるや。答へて云はく、一
 切衆生悉有仏性の説を聞いて之を信ずと雖も、又心を爾前の經に寄する一類の衆生をば
 無仏性の者と云ふなり。此信而不信の者なり。問うて云はく、証文如何。答へて云は
 く、恒河第二の衆生を説いて云はく、經に云はく「是くの如き大涅槃經を聞くことを得
 て信心を生ず。是を名づけて出と為す」と。又云はく「仏性は是衆生に有りと信ずと雖
 も必ずしも一切皆悉く之有らず。是の故に名づけて信不具足と為す」文。此の文の如
 くんば、口には涅槃を信ずと雖も心に爾前の義を存する者なり。又此の第二の人を説い
 て云はく「信ずる者にして慧無くば顛倒して義を解するが故に」等云云。顛倒解義とは、
 実經の文を得て權經の義と覺る者なり。問うて云はく、信而不解得道の文如何。答へ
 て云はく、涅槃經の三十二に云はく「此の菩提の因は復無量なりと雖も、若し信心を説
 けば已に攝尽す」文。九に云はく「此の經を聞き已はって悉く皆菩提の因縁と作る。
 法光明毛孔に入る者は必ず定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云云。法華
 經に云はく「信を以て入ることを得」等云云。問うて云はく、解而不信の者は如何。答
 ふ、恒河の第一の者なり。問うて云はく、証文如何。答へて云はく、涅槃經の三十六に
 第一を説いて云はく「人有りて是の大涅槃經の如来常住無有變易常樂我淨を聞く
 とも、終に畢竟して涅槃の一切衆生悉有仏性に入らざるは一闍提の人なり。方等經を
 謗じ五逆罪を作り四重禁を犯すとも、必ず當に菩提の道を成ずることを得べし。須陀洹
 の人・斯陀含の人・阿那含の人・阿羅漢の人・辟支仏等必ず當に阿耨多羅三藐三菩提
 を成ずることを得べし。是の語を聞き已はって不信の心を生ず」等云云。問うて云はく、
 此の文不信とは見えたり。解而不信とは見えず如何。答へて云はく、第一の結文に云は
 く「若し智慧有りて信心有ること無くんば、是の人は則ち能く邪見を増長す」文。